

蓋然性を表す副詞と文末のモダリティ形式

杉 村 泰

キーワード：蓋然性、キット、モシカスルト、ニチガイナイ、カモシレナイ

1. はじめに

従来、日本語の副詞「カナラズ」、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」は、蓋然性の程度を表す副詞として一つのグループにまとめられ、例えば「カナラズ」は100パーセント、「キット」は90パーセント、「タブン」は80パーセント、「モシカスルト」は50パーセントの蓋然性を表すといった具合に、何となく蓋然性の順に一例に並んでいると説明されることが多かった。

これに対し、工藤（1982）、山田（1982）、森本（1994）は、「カナラズ」と「キット」では話し手の主観性（対称面と作用面、命題とモダリティ）に違いのあることを指摘した。確かにこれは二語の違いの本質に関わる指摘である。しかし、主観性の定義が明確でないため、結局その違いがはっきりしないままに終わっていた。そこで杉村（1997）では、中右（1980）の命題とモダリティの分類基準¹⁾に従って、「カナラズ」を命題副詞、「キット」をモダリティ副詞と規定し、両者の違いが単に蓋然性の高さにあるわけではないことを明らかにした。（4.1節参照）

しかし、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」の3つは、依然として当然のごとく蓋然性の高低によって説明されることが多い。これに対し本稿では、文末のモダリティ形式との共起関係を根拠に、これら3つは単なる蓋然性の高さの違いではなく、それぞれ固有の特徴をもつ副詞であると考えられる。

一方、蓋然性を表す文末のモダリティ形式については、これも従来「ダノ ϕ 」²⁾は100パーセント、「ニチガイナイ」は90パーセント、「ダロウ」は80パーセント、「カモシレナイ」は50パーセントの蓋然性を表すといったような説明がなされてきた。これについても、「ニチガイナイ、カモシレナイ」と「ダロウ」とでは「ニチガイナイ - ダロウ」、「カモシレナイ - ダロウ」のようにシntagマティック（統合的）な関係にあることから、現在では認識系モダリティ（真偽判断のモダリティ）形式の中で異なるカテゴリーに属するものとして説明されるようになった。しかし、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」については、依然として蓋然性の高さによって説明されることが多い。これに対し三宅

(1992、1993)は、「ニチガイナイ」を「確信的判断」、「カモシレナイ」を「可能性判断」と区別して扱っている³⁾。本稿でも両者は単なる蓋然性の高さの違いではなく、それぞれ固有の特徴をもつ文末のモダリティ形式であると考ええる。(3節参照)

また、従来「キット」と「ニチガイナイ」はともに蓋然性の高いことを表す形式であるとされ、「モシカスルト」と「カモシレナイ」はともに蓋然性の低いことを表す形式であるとされてきた⁴⁾。こうした説明の根底には、益岡(1991)に見られるような日本語モダリティ論の考え方があると思われる。すなわち、ハンバーガーの中身を上下から同じパンで包むように、「キット」と「ニチガイナイ」、あるいは「モシカスルト」と「カモシレナイ」は、命題の上にあるのか下にあるのかという違いはあるものの、いずれも命題に対する話し手の認識判断(真偽判断)を表すという点で「同じ意味」を担っていると捉えられてきたのである。その様子を(1)に示す。

- (1) a. [キット [明日は雨が降る] ニチガイナイ]
b. [モシカスルト [明日は雨が降る] カモシレナイ]

このようなことから、これまで副詞と文末のモダリティ形式は、図1に示すように何となく平行的に捉えられてきた感がある。(もちろん先行研究でも明確に両者を「同じ意味」であると断定しているわけではない。しかし、一方がこういう意味だから共起する他方もこういう意味であると述べているように、両者の異質性はあまり意識されていない。)

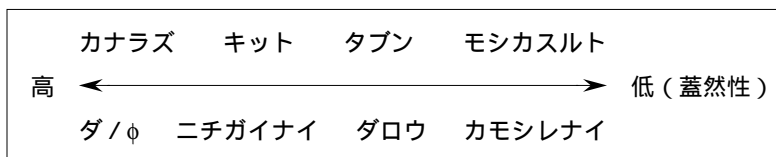


図1 従来の捉え方

しかし、もし本当に副詞と文末のモダリティ形式が同じ意味を表すのであれば、両者は常に一対一に対応するはずである。ところが、「キット」は「ダノφ」、「ダロウ」、「シロ」、「シヨウ」とも共起するし、「モシカスルト」は「ノデハナイカ」とも共起する。一方で、「ニチガイナイ」は「タブン」や「オソラク」とも共起するし、「カモシレナイ」は「アルイハ」や「アンガイ」とも共起する。従って、副詞と文末のモダリティ形式は互いに独立した意味を担っていると考えられる。

以下、本稿では、蓋然性を表す副詞「カナラズ」、「キット」、「タブン」、「モシカスルト

ト」を対象に、文末のモダリティ形式との意味の違いについて考察する。

2. 先行研究の問題点

従来、蓋然性を表す副詞の意味の違いは、蓋然性の高さによって説明されてきた。その場合、共起する文末のモダリティ形式が蓋然性の高さを測る「ものさし」として使用されてきた。例えば、「キット」は蓋然性の高いことを表す「ニチガイナイ」と共起するため蓋然性が高いと説明され、「モシカスルト」は蓋然性の低いことを表す「カモシレナイ」と共起するため蓋然性が低いと説明されてきた。しかし、このような説明は次の点で問題がある。

蓋然性の高さによる説明には限界がある

もし蓋然性を表す副詞の意味の違いが蓋然性の高さのみにあるのであれば、次の各表現はいずれの副詞を用いても許容度が等しくなるはずである。しかし、そうはならないことから分かるように、これらの副詞には蓋然性の高さでは説明のつかない意味の違いがあると考えられる。

(2) a. 彼は{キット/*カナラズ}君のことが好きなんでしょう。

b. 彼は毎日{?キット/カナラズ}6時に起きるのが習慣です。

(3) a. 明日は{キット/タブン/オソラク}学校に行くだろう。(推量文)

b. 明日は{キット/*タブン/*オソラク}学校に行くぞ。(意志文)

副詞と文末のモダリティ形式の間で循環論になっている

従来、「キット」は「ニチガイナイ」と共起することを根拠に、蓋然性の高いことを表すと説明されてきた⁵⁾。一方で、「ニチガイナイ」は「キット」と共起することを根拠に、蓋然性の高いことを表すと説明されてきた⁶⁾。このような説明は循環論となっており、まず副詞と文末のモダリティ形式のどちらかを他とは独立に規定する必要がある。この場合、副詞を先に分析しようとしても分析する文中に文末のモダリティ形式も入ってしまうため、まず先に副詞を伴わずに文を作れる文末のモダリティ形式から規定する必要がある。

「副詞」=「文末のモダリティ形式」ではない

「キット~ニチガイナイ」や「モシカスルト~カモシレナイ」など、副詞と文末のモダリティ形式には一定の共起関係が認められる。しかし、「キット」は「ニチガイナイ」だけでなく「ダ/φ_ク」「ダロウ_ク」「シロ_ク」「シヨウ」とも共起するし、「モシカスルト」は「カモシレナイ」だけでなく「ノデハナイカ」とも共起する。従って、副詞と文末のモダリティ形式は別々の機能を担っていると考えられる。

文末のモダリティ形式の意味は自明のものではない

一般に「ニチガイナイ」は蓋然性の高いことを表し、「カモシレナイ」は蓋然性の低いことを表すといったことが、当然のごとく言われてきた。しかし、杉村(2001a、2001b、2003)で指摘したように、両者には単に蓋然性という「量的」な違いがあるだけではなく、推量判断を含意するかどうかといった「質的」な違いが存在する。このように、従来自明のごとく言われてきた文末のモダリティ形式の意味も再検討が必要である。

以上の点を踏まえ、本稿ではまず文末のモダリティ形式の意味から検討していく。

3. 文末のモダリティ形式の意味

3.1 推量文と非推量文

田野村(1990)は次の二つの文を比較して、文には(4a)のように推量判断の関わるもの(「推量判断実践文」)と、(4b)のように推量判断の関わないもの(「知識表明文」)とがあることを指摘した。

(4)a.(アノ風体カラスルト)あの男はヤクザだ。(田野村1990)

b.(君八知ラナイダロウガ)あの男はヤクザだ。(田野村1990)

この点に関して本稿では、話し手がある「事態」の成立を見たままに捉えたり、記憶のままに捉えることを「認識」、事態の認識が不確定でその成立可能性について推論することを「推量」と呼び、区別して考えることにする。これらはまず客観世界に「事態」があり、次に事態に対する「認識」があり、認識が不確定の場合に「推量」が行なわれるという関係にある。この関係を図2に示す。

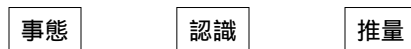


図2 認識と推量

このように、文には推量判断の関わる「推量文」と推量判断の関わない「非推量文」とに分けられる。こうした違いを区別することは、蓋然性を表す文末のモダリティ形式の意味分析にも有効である。

3.2 「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」

従来、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」は、蓋然性の高低を表し分ける一対の表現として扱われてきた。しかし、次の例からも分かるように、「ニチガイナイ」が基本的に推量文にしか使われないのに対し、「カモシレナイ」は様々な文に使われる。このことから、両者は決して蓋然性の高さによって区別できるような均質の表現ではないことが分かる。

(5) 推量文

- a. 明日は雨が降るカモシレナイ。
- b. 明日は雨が降るニチガイナイ。

(6) 伝聞文

- a. 明日は雨が降るカモシレナイそうだ。
- b. ?明日は雨が降るニチガイナイそうだ。

(7) 確認の文

- a. 明日は雨が降るカモシレナイだろ? (今日のうちにやっちゃおうよ。)
- b. *明日は雨が降るニチガイナイだろ? (今日のうちにやっちゃおうよ。)

(8) 一般的事実を表す文

- a. 宝くじというものは、当たるカモシレナイし当たらないカモシレナイものだ。
- b. *宝くじというものは、当たらないニチガイナイものだ。

(9) 連体修飾節

- a. 犯人が立ち寄るかもしれない店 (三原1995)
- b. ?犯人が立ち寄るに違いない店 (三原1995)

(10) 「ベキダ」との共起

- a. たまには外に出るべきカモシレナイ。
- b. *たまには外に出るべきニチガイナイ。

(11) 譲歩

- a. 私は子供のころ家に引きこもっていた。たまには外に出たカモシレナイが、基本的に家の中にいた。
- b. *私は子供のころ家に引きこもっていた。たまには外に出たニチガイナイが、基本的に家の中にいた。

このような違いのあることから、「ニチガイナイ」が第一義的に「推量」を表す表現であるのに対し、「カモシレナイ」は複数の事態の成立可能性を共に認めるという話し手の

「認識」を表すのが第一義であると考えられる。「カモシレナイ」は確かに推量文にも使われるが、推量の意味は推量文という文の意味に帰せられる。従来、「ニチガイナイ」と「カモシレナイ」は蓋然性の高低を表し分ける表現であるかのように言われてきたが、それは議論が推量文の場合に注目して行われてきたためである。

両者の違いについて、寺村(1984)は「ニチガイナイ」は独白的に使われるのが普通であると述べ、仁田(1991)も「ニチガイナイソウダ」は容認可能性がかなり落ち、「カモシレナイ」に比べて第三者の心的態度の表現になることが難しいと述べている(ただし結局は両者を一對の表現として扱っている)。しかし、このような違いは文法性判断が微妙で個人の頭では判定しがたい。そこで、本稿ではインターネットのホームページという大規模コーパスを利用することにより、寺村(1984)と仁田(1991)の直観が妥当であることを検証した。その結果を表1に示す。

検索語	ヒット数	検索語	ヒット数	出現比率
かもしれない	1 469 582	にちがいない	261 954	5.6:1
かもしれません	1 297 581	にちがいありません	33 927	38.2:1
かもしれないそう	236	にちがいそう	4	226.5:1
かもしれないそうです	1 123	にちがいそうです	2	
べきかもしれない	4 695	べきにちがいない	7	670.7:1

表1 「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の承接⁷⁾

表1に示されるように、普通体の「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の比が5.6:1であるのに対し、丁寧体の「カモシレマセン」と「ニチガイアリマセン」の比は38.2:1に広がっている。これは「ニチガイナイ」が対話文に使いにくいことを示している。実際、相手に向かって「明日は雨が降るカモシレナイよ」と言うのは自然であるが、「明日は雨が降るニチガイナイよ」と言うのは抵抗感が伴う。そういう場合は、「明日は雨が降るよ」とか、「明日は雨が降るに決まっているよ」と言うであろう。ただし、「ニチガイアリマセン」が33,927件もヒットしているように、こうした表現は決して非文ではなく、文章やアナウンサーの言葉など独白的に相手に伝える場面では使われる。次に伝聞の「ソウダ」との共起を見ると、「カモシレナイ」は自然に伝聞の対象となるが、「ニチガイナイ」はそれが難しいことが分かる。また、「ベキ(ダ)」との共起も「ニチガイナイ」は許容度が落ちる。以上のような事実から、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」は質的に異なる表現であると考えられる。

3.3 「ダノφ」と「ダロウ」

一般に「カモシレナイ」と対をなすのは「ニチガイナイ」であるとされている。しかし、本稿では「カモシレナイ」と対をなすのは「ダノφ」であるとする。その証拠に、先の(5a)～(11a)は次の(5c)～(11c)と対応関係にある。

- (5)c. 明日は雨が降るφ。
- (6)c. 明日は雨が降るφそうだ。
- (7)c. 明日は雨が降るφだろ？(今日のうちにやっちゃおうよ。)
- (8)c. 宝くじというものは、(まず)当たらないφものだ。
- (9)c. 犯人が立ち寄るφ店
- (10)c. たまには外に出るべきダ。
- (11)c. 私は子供のころ家に引きこもっていた。たまには外に出たφが、基本的に家の中にいた。

すなわち、話し手が他の事態の成立可能性を認めず、当該の事態の成立が確実であると認識した場合には「ダノφ」が使われ、話し手が他の事態の成立可能性を認め、当該の事態の成立が不確実であると認識した場合には「カモシレナイ」が使われる。このように、「ダノφ」と「カモシレナイ」は同じ「認識」という範疇の中で、一つの事態の成立可能性のみを認めるのか、複数の事態の成立可能性を同時に認めるのかという点で対立している。この点で、両者は第一義的に推量を表す「ニチガイナイ」とは異なる。

同様に「ダロウ」も、(12)のように推量文にも使われるし、(13)(14)のように非推量文にも使われる。そのため、これ自体が推量を表すわけではないと考えられる。

- (12) 明日は雨が降るダロウ。
- (13) 私って綺麗デショウ？
- (14) カレーに入れるのは人参ダロウ、玉葱ダロウ、あと何だっけ？

「ダロウ」の特徴は、「ダノφ」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」には後続するが、「ヨウダ」、「ラシイ」には後続しないという点にある。

- (15) a. あの男はスパイ - ダロウ。
- b. あの男はスパイカモシレナイ - ダロウ。
- c. あの男はスパイニチガイナイ - ダロウ。
- d. *あの男はスパイノヨウ - ダロウ。

e. *あの男はスパイラシイ - ダロウ。

杉村(2001c)でも論じたように、「ニチガイナイ」が話し手の確信(思い込み)による推量を表すのに対し、「ヨウダ」、「ラシイ」は推論の裏付けとなる根拠に基づく推量を表す。「ダロウ」が「ヨウダ」、「ラシイ」につかないということは、これが根拠に基づく推量には使えないことを示している。「ダロウ」は証拠不足のため、断定を保留し、当該の認識や推量が確証できないことを表す表現であると考えられる。

以上の考察を整理すると次のようになる。

「ダノφ」：当該の事態の成立が確実であると認識したことを表す

「カモシレナイ」：当該の事態の成立が不確実で、他の事態の成立する可能性もあると認識したことを表す

「ニチガイナイ」：話し手の確信により、当該の事態の成立が確実であると推量したことを表す

「ダロウ」：証拠不足のため当該の認識や推量が確証できないことを表す

4. 副詞の意味

4.1 「カナラズ」と「キット」

「カナラズ」と「キット」はともに事態成立の蓋然性と関わる副詞であるが、前者は命題を限定し、後者はモダリティを限定するという違いがある。(16)を見る限り、「カナラズ」と「キット」の違いははっきり見えない。しかし、(17)を見ると、「カナラズ」がコトの内部に入るのに対し、「キット」はコトの内部に入りにくいことが分かる。これにより、(16)の「カナラズ」は命題成分の「来る」と共起し、「キット」はモダリティ成分の「ダロウ」と共起することが分かる。

(16) 彼は{カナラズ/キット}来るだろう。

(17) a. 私は[彼が{カナラズ/?キット}来る]コトを信じている。

b. 彼は[カナラズ/?キット}来る]のですか。

c. 彼は[カナラズ/?キット}来る]わけではない。

このことから、「カナラズ」は命題面から事態が例外なく確実に成立することを表す表現、「キット」はモダリティ面から話し手の蓋然性判断の高さを表す表現であると規定される。

4.2 「キット」, 「タブン」, 「オソラク」

「キット」, 「タブン」, 「オソラク」はいずれもコトの内部に収まらない。そのため、いずれもモダリティ面から話し手の蓋然性を規定する表現であると考えられる。しかし、これらの副詞は単純に蓋然性の高低によって区別されるわけではない。その理由は、「タブン」と「オソラク」が推量文にしか使われないのに対し、「キット」は推量文だけでなく意志文、命令文、勧誘文にも使われるからである。

- (18) a. 明日は{キット/タブン/オソラク}学校に行く{ ϕ /ダロウ/ニチガイナイ}。(推量文)
 b. 明日は{キット/*タブン/*オソラク}学校に行くぞ。(意志文)
 c. 明日は{キット/*タブン/*オソラク}学校に行け。(命令文)
 d. 明日は{キット/*タブン/*オソラク}一緒に学校に行こう。(勧誘文)

この点について石神(1987)は、「陳述副詞「きっと」は、程度の極大ということからの意味を共通項にして、断言・推量・意志・願望という陳述的要素が加わることによって、それぞれの陳述副詞としての意味を表現している」と説明している。これは「キット」の性質を見る上で重要な指摘であるが、ここでの「程度の極大」は「ことからの意味」ではなく、話し手の判断すなわちモダリティに属するものである。そこで本稿では、「キット」は推量、意志、命令、勧誘を包括し、事態の実現に対する話し手の強い信念を表す表現であると考えられる。

これに対し、「タブン」と「オソラク」は推量文にのみ使われる。両者の違いは、「オソラク」は根拠のある推量を表す「ラシイ」, 「ヨウダ」と共起するが、「タブン」はそれが難しいという点にある。

- (19) {*キット/?タブン/おそらく}設計者は、大学に未来的な外観を与えることを意図した{らしい/ヨウダ}が、(後略)(貴志祐介『十三番目の人格』)

これにより、「タブン」は推量判断において直感的にある一つの帰結を導き出したことを表す表現であると考えられる⁸⁾。

4.3 「モシカスルト」

「モシカスルト」もコトの内部に収まらないため、モダリティ副詞であると考えられる。従来、「モシカスルト」は共起する文末のモダリティ形式の違いを根拠に、「キット」, 「タブン」より蓋然性の低いことを表すとされてきた。

- (20) a. 明日は{キット/タブン/*モシカスルト}学校に行く{ニチガイナイ/ダロウ}。
b. 明日は{*キット/*タブン/モシカスルト}学校に行くカモシレナイ。

しかし、これらの文末のモダリティ形式は単純に蓋然性の高低で一列に並んでいるわけではない。そのため、これらの副詞も単純に蓋然性の高低で並んでいるとは説明できなくなる。

「モシカスルト」は蓋然性の低いことを表すというよりは、次のように複数の事態の成立可能性を同時に認める場面で使われることが多い。蓋然性の低さは、複数の事態を同時に認めることから来る派生的な意味であると考えられる。

- (21) だけど、もしかしたら、真相はそうじゃないかもしれないって思いはじめたんだ。(貴志裕介『黒い家』)

和佐(2001)は「モシカスルト」について、「肯定とも否定とも判断がつかないとき、両方の命題成立の可能性があると判断されるとき使用できる副詞」であると規定した。しかし、このような規定は「モシカスルト」と「カモシレナイ」を同じ意味を担うものとして扱うことになる。ところが、「モシカスルト」は「カモシレナイ」以外にも「可能性がある」や「ノデハナイカ」とも共起する。

- (22) 範子は(中略)IQも測定不能で、もしかすると、言語能力がまったく欠如している可能性さえあった。(貴志裕介『十三番目の人格』)
(23) もしかすると、千尋の交代人格は、すべて千尋自信が生み出しているのではないだろうか？ 由香里の中で、そんな疑問が芽生えた。(貴志裕介『十三番目の人格』)

「可能性がある」は複数の事態の成立可能性を同時に認めるが、「ノデハナイカ」は一つの事態の成立に判断が傾いている(安達1999)。そのため、(24c)は非文となる。

- (24) a. 明日は学校に行くカモシレナイし、行かないカモシレナイ。
b. 明日は学校に行く可能性もあるし、行かない可能性もある。
c. *明日は学校に行くノデハナイカ、行かないノデハナイカ。

従って、「モシカスルト」は文末のモダリティ形式とは独立に独自の意味を規定する必

要がある。そこでもう一度「モシカスルト」の使われる文脈を見ると、「当初、当該の事態の成立する可能性を想定していなかったが、今はその可能性もあると思うようになった」という場面で使われていることが分かる。「モシカスルト」はこのように想定外の事態の出現を表すところに特徴がある。

5. まとめ

以上、本稿では蓋然性を表す副詞「カナラズ」、「キット」、「タブン」、「モシカスルト」の意味について考察した。その結果、これらの副詞は単純に蓋然性の高低に従って一列に並んでいるわけではないことを明らかにした。まとめると次のようになる。

〔命題副詞〕命題成分を修飾限定する

カナラズ：事態が例外なく確実に成立することを表す

〔モダリティ副詞〕モダリティ成分を修飾限定する

キット：事態の実現に対する話し手の強い信念を表す

タブン：推量判断において直感的にある一つの帰結を導き出したことを表す

モシカスルト：当初、当該の事態の成立する可能性を想定していなかったが、発話時点において当該の事態の成立する可能性もあると判断したことを表す

従来、蓋然性を表す副詞と蓋然性を表す文末のモダリティ形式は、意味的に並行したものと捉えられてきた。これに対し、本稿では副詞と文末のモダリティ形式は必ずしも一対一対応の関係にあるわけではないことから、両者は互いに独立した意味を担っていることを主張した。このように考えることにより、さらに精密な意味記述ができるのである。

注

1) 中右(1980:159)による命題とモダリティの定義は次のとおりである。

命題：話者が切り取った現実世界の状況(出来事、状態、行為、過程など)

モダリティ：発話時における話者の心的態度を叙述したもの

2) 「ダ」と「φ」は交替形の関係にある。「ダ」が名詞や形容動詞型活用の語につくのに対し、「φ」は動詞型活用の語や形容詞型活用の語につく。

3) ただし、「ハズダ」を「確信的判断」に含めるなど、本稿の考えとは異なる。詳しくは杉村(2001a、2001b)で論じた。

4) 工藤(1982)、野田(1984)、森山(1989)、仁田(1991)、益岡(1991)、宮崎(1992)、中島

(1993)、森本(1994)、劉(1996)、安達(1999)など。

5) 森本(1994)、劉(1996)など。

6) 益岡(1991)、宮崎(1992)、中畠(1993)など。

7) 2002年8月29日、検索エンジン goo を使って検索した。「にちがいない」は「に違いない」の形も検索した。

8) 「オソラク」については、当面「推量判断において根拠に基づきある一つの帰結を導き出したことを表す」と考えているが、「ニチガイナイ」、「ラシイ」、「ヨウダ」との関係など、さらに考察が必要である。

付記：本稿は平成14年度第3回日本語教育学会研究集会(2002年6月23日於南山大学)において、「現代日本語における蓋然性を表す副詞の意味分析 カナラズ、キット、タブン、オソラク、モシカスルト、キマツテを対象に」と題して発表したものに加筆修正したものである。

参考文献

- 安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』, くろしお出版
- 工藤 浩(1982)「叙法副詞の意味と機能 その記述方法をもとめて」『国立国語研究所報告71 研究報告集3』, pp 45 - 92, 秀英出版
- 石神照雄(1987)「陳述副詞の修飾」寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人(編)『ケーススタディ 日本文法』, pp 96 - 101, おうふう
- 杉村 泰(1997)「副詞「キット」と「カナラズ」のモダリティ階層：タブン/タイテイとの並行性」『世界の日本語教育』第7号, pp 233 - 249, 国際交流基金
- (2001a)「カモシレナイとニチガイナイの異質性」『言葉と文化』第2号, pp 79 - 93, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻
- (2001b)「現代日本語における文末表現の主観性 ヨウダ、ソウダ、ベキダ、ツモリダ、カモシレナイ、ニチガイナイを対象に」『世界の日本語教育』第11号, pp 209 - 224, 国際交流基金
- (2001c)「推論の型と推論の根拠の関連について ニチガイナイとヨウダ、ラシイの違い」『ことばの科学』第14号, pp 23 - 39, 名古屋大学言語文化部言語文化研究会
- (2003)「続・カモシレナイとニチガイナイの異質性」『言葉と文化』第4号, pp 261 - 276, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻
- 田野村忠温(1990)「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』, pp 785 - 795, 三省堂
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』, くろしお出版
- 中右 実(1980)「文副詞の比較」, 国広哲弥(編)『日英語比較講座 第2巻 文法』, pp 157 - 219, 大修館書店
- 中畠孝幸(1993)「確かさの度合い カモシレナイ・ニチガイナイ」『三重大学日本語学文学』第4号, pp 13 - 20, 三重大学日本語学文学会
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房

- 野田尚史(1984)「～にちがいない/～かもしれない/～はずだ」『日本語学』第3巻第10号, pp.111 - 119, 明治書院
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』, くろしお出版
- 三原健一(1995)「概言のムード表現と連体修飾語」仁田義雄編『複文の研究』, pp.285 - 307, くろしお出版
- 三宅知宏(1992)「認識のモダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢』第26号, pp.35 - 47, 大阪大学文学部
- (1993)「認識のモダリティにおける確信的判断について」『語文』第六十一輯, pp.36 - 46, 大阪大学国語国文学会
- 宮崎和人(1992)「現代日本語の判定文について」『広島修大論集 人文編』第32巻第2号, pp.35 - 63, 広島修道大学人文学会
- 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版
- 森山卓郎(1989)「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』, pp.57 - 74, くろしお出版
- 劉 婧(1996)『陳述副詞の研究 話し手の確信度を表す副詞を中心に』名古屋大学修士学位論文
- 和佐敦子(2001)「日本語とスペイン語の可能性判断を表す副詞 疑問文との共起をめぐって」『言語研究』第120号, pp.67 - 88, 日本言語学会
- 山田 進(1982)「カナラズ・キット」, 国広哲弥・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子(編)『言葉の意味3』, pp.186 - 194, くろしお出版